

クリエイティブとリアルを共存させる稀有なるメゾン

文/エッセイスト、服飾史家・中野香織

なかの・かお●東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。2008年4月より明治大学特任教授。著書「モードとエロスと資本」(集英社新書)、「愛されるモード」(中央公論新社)、訳書にジャネット・ウォラク「シャネル スタイルと人生」(文化出版局)など多数。ブログ <http://www.mode.kaori-nakano.com>

ランバンの名はファッション史においてはあまりドラマチックに語られることはない。オートクチュールを創始したウオルト、ゴルセツトから女性を解放したボワレ、リトルブラックドレスのシャネル、タキシードルックのサンローラン、などのようにキャッチーな前置きがつくような功績で有名だったわけではないからである。

ジャンヌ・ランバンは、なにか際立ってセンセーショナルで画期的なモードを提案したわけではない。だが、ほかならぬこの点こそが、ランバンの最大の強みだったのである。1930年代の大恐慌時代や、それに続く第二次世界大戦の時、多くのオートクチュールが中断を余儀なくされるなか、ランバンは着実にビジネスを続けることができた。伝統を覆すのではなく、時代に挑むのではなく、贅沢や簡素に走るでもない。時代の空気を敏感に取り入れた柔軟でバランスのいいランバンスタイルが、女であることを楽しみながら現実を生き抜きたい多くの女性たちに幸福感を与え、支持され続けてきたからにはかならない。

厳しい社会状況のなかでもビジネスを規則正しく続けることができた理由は、ほかにもある。ジャンヌの仕事や人生に対する姿勢である。ファッション界についてまわる虚飾やふわふわした夢想とは無縁な、堅実な自然体とでもいふべき姿勢。10代の頃から乗合馬車に乗らずに儉約し、人形の服を作ってお金を貯め、大家族の面倒を見てきたジャンヌは、家庭内の固い絆を何よりも大切に

「時代の空気を敏感に取り入れた柔軟でバランスのいいランバンスタイルが、女であることを楽しみながら現実を生き抜きたい多くの女性たちに幸福感を与え、支持され続けてきた」



し、儉約につとめながら、勤勉に、規律正しく、器用さを発揮して精力的に働いた。かといってカタブツだったわけではなく、アートコレクションをはじめ各国のさまざまな博覧会にも積極的な貢献をしているうえ、同時代の演劇や芸術とも深くかかわり、女優達の公私の服を作ることを通してハイソサエティの社交も楽しんでいる。ランバンを表す香水「アルペーシュ」のボトルには、ポール・リビアによる「母と娘」のイラストが描かれる。母ジャンヌと、愛娘マルグリット(後にマリー・フランシュと改名)である。母の娘に対する献身的な愛情を礎とし、娘や周囲に対して愛あるエネルギーを注ぎ続けることで、自然に人間的にメゾンを成長させてきた。そんな感がある。

就任10周年となる現アーティストディレクターのアルペール・エルバスは、もう故人であるジャンヌ・ランバンと「とてもいい関係を結んでいる」という。コレクションの前

にアーカイヴを訪れると、「毎回、違うことを教えてくれる」と。昨年11月上旬、「インタビュナショナル・パラルド・トリビュン」紙のインタビュに答えて、そのように語っている。ジャンヌの女性観を深く理解しているエルバスは、ジャンヌの静かな信念、つまり、女性は年齢に縛られることなく、どんな世代であつても女性らしさを楽しむべき、という考え方を受け継ぎ、現実を活動的に生きながらも女らしさを感じていたいあらゆる世代の顧客の支持を獲得している。

同インタビュでエルバスは、実の母から受け継いだ教

Jeanne Lanvin